

【講演会・シンポジウムを振り返る②】

名古屋の歴史まちづくり

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

(やまだ・あきら)
山田 明

一 シンポジウムに参加して

恒例の研究所シンポジウムが「パブリック・アーケオロジ」の視座から、現代社会における文化財保護の新しいあり方をテーマにするという、最初はまごついた。こんな難しいテーマで人が集まるのか、研究所に長年関わってきた者として心配になった。でも大きな会場に意外と人が集まっており、まずはひと安心したものである。

パブリック・アーケオロジとは、基調講演の講師・松田陽氏によれば「考古学と社会とのつながりを考察し、実践を通して両者の間に良好な関係を築いていくという試みである。」パブリック・アーケオロジの原語を和訳するのは難しいが、「共生の考古学」のような言葉が、その本質を最も適切に表していると述べる。パワーポイントを使った明快な講演を聞き、だんだんとシンポジウムが問う問題の輪郭が見えてきた。そして、講師と三人のパネリストによる討論により、文化財や歴史文化

遺産の課題を具体的な事例から知ることができ、パブリック・アーケオロジの視座の意味するところが分かってきた。

シンポジウムでは、とりわけ西澤泰彦氏の報告と討論が興味深かった。西澤氏は建築史の専門家であり、最近では『植民地建築紀行』（吉川弘文館）など多くの著書を刊行されている。「建築を褒める」視点に立ちながら、建築の歴史を社会とのかかわりの中で考えられてきたという。未指定・未登録の文化財保護の問題など示唆に富む指摘が多かったが、なかでも関心をもったのが「瑞穂うるおいまちづくり会」の活動である。あつたが、この会についてインターネットで調べてみることにした。

二 「瑞穂うるおいまちづくり会」

瑞穂区では二〇〇二年に魅力発見ワークショップ「レトロな瑞穂区を探そう！」を実施し、汐路地区の昭和初期の建物に注目して情報を収集

した。ワークショップでつくった即席ガイドブックをきちんとした報告書にまとめようと、参加者が再び集まった。こうして報告書が完成して、二〇〇三年六月に継続してまちの魅力の発見・創造・発信を行う市民団体として「瑞穂うるおいまちづくり会」が立ち上がった。何回かワークショップを開催し、レトロな瑞穂区のマップを作るなどの活動を続けている。今回のシンポジウムには、この会のメンバーの方たちが多く参加されていた。難しそうなテーマのシンポジウムに一定の参加があったのは、まちづくりの会のおかげでもある。

「金シャチ商店街」というサイトに、「落ち着いた街並み／桜山／瑞穂通界限を歩こう！」（二〇〇七年掲載）というのがある。桜山から我が滝子キャンパスの八高古墳、博物館から東山荘（とうざんそう）などを歩く案内が写真入りで載っている。東山荘について名古屋都市センター「まちづくり来ぶらり」六五号で特集している。東山荘は山崎川沿いに大正初期から一〇数年かけて建てられた別荘で、大正初期の和風別荘の特徴をよく表している。名古屋市に寄贈され、正門と塀は一九九一年に名古屋市都市景観重要建築物等に指定、二〇一三年には国の有形登録文



満開の桜の山崎川

化財に登録された。私もよくまち歩きするコースだ。まち歩き好きな人は、ぜひ歩いてみてほしい。とくに春は山崎川たりの桜は見事である。このページ作成にあたっては、瑞穂うるおいまちづくり会発行の「伝えたい！歩いて知るレトロなまち／八高古墳から東山荘まで」を参考と記されている。

興味深い「瑞穂うるおいまちづくり会」の活動について、西澤氏の示唆に富む発言を箇条書き的に紹介しておこう。

- ・ひたすら歩いて調べたものをピックアップして、それを絵にした。これは奥深い絵であり、ぜんぶ許可を取っている。



大学東門前の魅力的な住宅 1

- ・一〇年やっていろいろ分かってきた。有名なのは東山荘ぐらいいで、無名ブランドによるおしゃれであり、それが集まってくると居住環境が良いと思ってくれる。
- ・このあたりは名古屋の典型的な郊外住宅地であり、十分に歴史的価値はある。文化財だと判断するが、多くは未指定・未登録の物件であり、どんどん消失している。
- ・歩き始めた頃「所詮、学者だった」と思った。歴史をやっているとスタート時点を探す。会の住んでいる人たちは「今の街は何でこうなっているのか」と考えようとする。

こうした指摘は、歴史遺産や文化



大学東門前の魅力的な住宅 2

財だけでなく、歴史まちづくりを考えるうえでも参考になる。シンポジウムから少し離れるが、名古屋の個性と魅力と関わらせて、歴史まちづくりについて考えてみたい。

三 名古屋の個性と魅力

二〇一三年春、村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』が刊行され、主な舞台が名古屋でもあり興味深く読んだ。なぜ名古屋という都市のローカル性を出したのか、朝日新聞五月二六日「ハルキ流ナゴヤ考」のなかで、清水良典氏は次のように述べている。「日本の象徴としての名古屋」の居心地の良さ

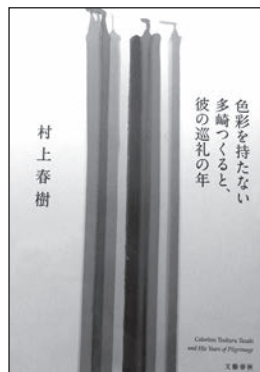
は「楽園」でもあり「ぬるま湯」でもある。しかし、「そういう共同体は崩れて、成り立たなくなったところから今回の小説は出発している」と読む。

一〇年ほど前に刊行された村上春樹ほか『東京するめクラブ 地球のはぐれ方』にも名古屋が登場し、村上から手厳しい評価を受けていた。村上の指摘をいくつか紹介しよう。「名古屋」という場所の特殊性は、そこが押しも押されぬ大都市でありながら、どこかしら異界に直結しているような呪術性をまだ失っていない」「この町には、物語を作っていく段階になんか欠落があるような気がする」「『この町には、物語を作っていく段階になんか欠落があるような気がする』」「『この町には、物語を作っていく段階になんか欠落があるような気がする』」の連続性もあるし、地理的な連続性もあるし、それらが絡みついて都市なわけ。それが名古屋って、そういうのが稀薄な印象だから、手がかりみたいなものがなくて、戸惑っちゃうところがあるよね。」

こうした村上の指摘は、名古屋の



村上春樹と名古屋 (1)



村上春樹と名古屋 (2)

個性と魅力を考えるうえで示唆に富む。名古屋都市センター『景観が語る名古屋』(一九九九年)掲載の「都市名古屋の一世紀」にも同様の指摘がある。慶長の城下町建設から明治維新、そして戦災復興を経た都市名古屋の足跡は、都市計画と実践の歴史であったが、同時にそれは、古いものを壊し、新しいものを建設するという開発の論理によって押し進められてきたことを意味している。古い建造物を手掛かりに定点観測を試みたこの写真集の製作過程で気づいたことは、新しさを引き換えに私たちは界限への愛着や記憶の拠り所を失おうとしている現実だった。成熟した都市には、時間や記憶が可視化されたモニュメントがもっと欲しいというのが率直な印象である。守る景観と作る景観のバランスとコントラストが、都市をいっそう魅力的に輝かせるにちがいない。

この指摘に同感するところが多く、シンポジウムでの報告や議論に

も関連している。観光にも触れておきたい。

四 名古屋の観光まちづくり

九月に『名古屋の観光力 歴史・文化・まちづくりからのまなざし』を風媒社から刊行した。七年余の観光研究プロジェクトと総合科目「名古屋の観光」の成果である。本の帯に「顔のない都市からゆたかな文化のまちへ」と書かれており、観光のまなざしを名古屋にあて、「観光都市」名古屋の可能性を多角的・学際的に探るものである。

吉田一彦氏とともに編集作業に携わり、「名古屋の観光まちづくり」の章を執筆した。

先に紹介したように、都市として歴史ないし地理的連続性やストーリー性の欠如、界限への愛着や記憶の拠り所の喪失といった言説をヒントにして、名古屋のまちづくりを過去から振り返り、観光の課題と戦略を提示することを課題とした。詳細は本を読んでもらいたいだが、言いたかったことは次の点である。「清洲越」により名古屋に城下町が誕生して、名古屋城と熱田という南北を軸にまちづくりが進められた。明治以降に軍需工業都市として成長を遂げ、その結果として徹底した空襲に

より市街地は焼土と化し、名古屋城をはじめとした貴重な歴史遺産が焼失した。

全国有数の戦災復興事業が実施され、区画整理を主体とした計画的なまちづくりが推進された。都心の墓地移転や百メートル道路などは、戦災復興のシンボルであるとともに、名古屋のまちの個性と魅力にも大きな影響を及ぼした。新修名古屋市史第七巻においても次のような指摘がある。「焼け野原のなかで進められたまちづくりにおいても、戦後の復興が急がれるあまり街の歴史や地域的特性を顧みるゆとりに欠けるきらいがあった。他都市に先駆けていち早く取り組まれた戦災復興事業は、来るべき車社会を予測し、先ず土地の整備を目指す区画整理手法を用いて急増する人口や産業に対処しようとしたのである。…名古屋のまちが機能的で利便性が高いと言われる半面、白い街、画一的な街と言われるのはこのあたりに原因があるかもしれない。」

名古屋はその後、「ゆとりとうるおいのあるまちづくり」を掲げ、歴史的環境や歴史遺産の保存にも力を入れる。二〇〇〇年策定の名古屋新世紀計画二〇一〇は「誇りと愛着の持てるまち・名古屋をめざして」、今後のまちづくりを方向づけている。そ

のなかで「まちづくりには、都市の風土と特性に配慮した都市基盤の整備をすすめるとともに、そこに住んでいる人々が自分のまちへの愛情や誇りの感情を自分の心の中に育てていくことが必要です。わがまちへの愛着を持つことにより、都市の魅力を実感し、自らのまちに誇りを持つことができます。」と述べている。この指摘もシンポジウムの趣旨に沿うものであり、「瑞穂うるおいまちづくり会」の活動にも当てはまる。

名古屋市は二〇一〇年一二月に観光戦略ビジョンを策定した。観光戦略研究会の座長として策定に関わったので、これには思い入れがある。戦略ビジョンは名古屋らしい魅力の創出として、「歴史観光」と「都市観光」の二つをあげる。観光まちづくりを推進して、ぜひとも「住んでよし、訪れてよしの名古屋」をめざしてほしい。

五 まとめにかえて

人文社会学部の講義に社会調査実習がある。二〇一〇年度のテーマを「名古屋の歴史観光とまちづくり」とした。それまでも観光をテーマにしてきたが、歴史観光に焦点をあてたのは名古屋開府四〇〇年の節目の年であり、名古屋の歴史に関心

が高まっていたことによる。調査では「武将観光」だけでなく、広い視野から歴史観光を重層的に調査することにした。名古屋城でアンケート調査を実施するとともに、有松・文化のみち・四間道の三地域をフィールドワークの対象地として、歴史まちづくりの構想と現実、地元住民の意識と活動に焦点をあてた。「瑞穂うるおいまちづくり会」の活動とも共通するところが多かった。

名古屋の歴史まちづくりと歴史観光を考えるうえで、二〇一一年三月策定の「名古屋市歴史まちづくり戦略」が注目される。人・まち・歴史をつなぎ、絵となり物語となり、時とともに熟成する「語りたくなるまち名古屋の実現」めざす戦略ビジョンである。

次の戦略策定の趣旨は、本シンポジウムや『名古屋の観光力』の問題意識とつながるものである。少し長いが紹介して、本稿のまとめにかえたい。

「名古屋は、古代熱田における文化の興隆、近世城下町としての都市の形成と発展、近代における産業都市化による大都市への飛躍など、幾多の歴史を積み重ねてきたまちです。しかしながら、戦災によって、まちのシンボルであった名古屋城・天守閣をはじめ、城下・熱田の大半を焼失

してしまいました。また、名古屋は市街地の大半を区画整理で整備される一方、失われた歴史資源も少なくありません。語り継がれる歴史の積み重ねは多いものの、現在の市街地において歴史を物語る町並みや風景は多くは残っておらず、身近にまちの歴史が感じられにくい都市環境ともいえます。」

『人間文化研究所年報』既刊一覧

創刊号（二〇〇六年三月発行）

特集「宗教と共生」

第一部「仏教と共生」

第二部「宗教の現代的諸相」

第二号（二〇〇七年三月発行）

特集「トランスナショナルリズム」

第一部「越境の文学」

第二部「外国人住民との共生」

第三号（二〇〇八年三月発行）

特集「福祉」

第一部「地域社会と福祉」

第二部「自立に向けて」

第四号（二〇〇九年三月発行）

特集「名古屋の観光」

第一部「『名古屋と観光』と名古屋学」

第二部「観光まちづくり」

第五号（二〇一〇年三月発行）

特集「持続可能な社会」

第一部「人間文化研究所「五周年記念シンポジウム」

第二部「『持続可能な社会』とESD」

第六号（二〇一一年三月発行）

特集「博物館と大学」

第七号（二〇一二年三月発行）

特集「博物館と大学Ⅱ」

第八号（二〇一三年三月発行）

特集「『近代』の文化財―〈産業遺産〉の保存と継承―」

*人間文化研究所のウェブサイトでも一部ご覧になれます。

(<http://www.nagoya-cu.ac.jp/human/1084.htm>)